

濟州島4.3事件を訪ねて

—日本平和学会2007年度秋季研究集会参加報告

岩 本 勲

A visit to the Jeju4.3—A report of Japan Peace Research Association—

IWAMOTO Isao

1. 濟州島

濟州島4.3事件といっても、ピンと来ない人も多いかもしれない。かくいう筆者も、恥ずかしいことながら、大韓民国樹立・単独選挙に反対する民衆暴動、といったほどの乏しい知識しかなかった。機会があれば、そこで何が起こったのかを調べたいと思いつつも、手をつけていない事件であった。ただ、以前から「濟州島」という名は気になっていた。というのは、筆者は大阪出身で、親戚の家が猪飼野（今はこの地名はない）にあり、この辺は濟州島から逃げてきた韓国人も多いという話もあったし、大学に入ってから、大学に吹田事件関係者が何人か残っており、この人たちから同事件では韓国人・朝鮮人が勇敢に闘ったが、そこにも濟州島出身者がいたと聞かされていた。

濟州島は今では、韓国の有数の観光地であり新婚旅行のメッカでもある。島は朝鮮半島の南端百数十キロにあり閑空から1時間半の距離、面積は1845km²で淡路島の約3倍の広さ、島の中心部には漢拏山（ハルラサン標高1950m、韓国最高峰）が聳え立つ火山島である。

2007年度の平和学会秋季研究集会が濟州島であると知り、一も二もなく参加を申し込んだ。ところが、4.3事件の勉強の方は日常の忙しさにかまけてサッパリだった。学会日も間近になったある日、まるで夏休み間際になって宿題をバタバタやる生徒のように、韓国史研究を専門にしておられる、藤永壮教授に何かすぐにも読める参考書がないものかとお尋ね

平成19年11月30日 原稿受理
大阪産業大学 教養部

した。そこで、驚きかつありがたかったことは、藤永先生が「済州四・三事件の歴史的位相」(岩波講座・アジア・太平洋戦争4, 所収)を執筆されている文字通り4.3専門家であったことである。そこで急遽、抜き刷りをいただき、参考書として「4.3事件」(四・三事件研究所発行、非売品)をお借りし、また金石範・金時鐘『なぜ書きつづけてきたか・なぜ沈黙してきたか』を併せて読むにわか勉強で学会に臨んだ。

2. 4.3事件

事件の概略はこうである。4.3事件は、1947年3月1日の独立運動記念集会参加者に対する警察の発砲を起点として、軍・警察・西北青年団(韓国本土から派遣された、朝鮮北部出身の右翼青年団)の弾圧に対する抵抗と南朝鮮単独選挙・南朝鮮単独政府に反対して、1948年4月3日、南労党(南朝鮮労働党)済州道武装部隊350人が蜂起して以来、1954年9月21日まで続いた武力抗争である。この間、多くの住民が殺され、その数は約25000~30000人と推定され、このうち10%強は戦闘能力のない老人や10歳以下の子供たちによって占められている。

何故このような事件が起こったのか。朝鮮半島が1945年、日本の植民地支配から開放された直後から、朝鮮建国準備委員会(建準)が結成され、全国では建準支部が145を数え、9月6日に朝鮮人民共和国の樹立を宣言した。各地の建準は人民委員会に再編成された。だが、9月8日に朝鮮南部に進駐してきた米軍は、この運動が左翼運動であるとして全面的な弾圧を開始した。一方、済州島でも9月に建準が結成され、すぐに人民委員会に再編された。済州島では1947年3月1日、3.1独立運動28周年記念集会を行い、米軍と李承晩が行おうとしていた大韓民国の樹立が南北分断を固定化・永久化するものとして、これに反対した。警察が、この集会参加者に発砲し、その後、米軍は鎮圧軍隊とともに西北青年団を送り込み、人民委員会と同調者とおぼしき人々に対する厳しい弾圧を開始した。南労党はこれに耐え切れずに、武装蜂起に及んだのである。

3. 学会での主な報告の要旨

学会は11月9~11日、日本平和学会・済州4.3研究所・済州大学校平和研究所の共催で行われた。フルタイトルは、「東アジアにおける『民衆の平和』を求めて一日韓歴史経験の交差—」。学会では、もちろん4.3事件だけではなく、このタイトルに関連する多くの報告が行われたが、やはりメインは4.3事件であった。したがって、本稿では、4.3事件に焦点を当てた報告とする。

大会趣旨の一節に、今回4.3事件を取り上げた理由が述べられている。「秋季研究集会では、今後の東アジアにおける『民衆の平和』を模索するべく、歴史の影、すなわち〈周辺〉

の視点から再度、日韓の同時代史を捉えなおしてみたい。主催地の韓国濟州道は、1948年、島の人口の9分の1が殺害される「4.3事件」のトラウマに苦しんできたが、1999年の「4.3特別法」の制定、真相調査報告書の刊行、国家暴力についての大統領の公式謝罪、4.3平和公園の造成など、過去の清算が大きく前進した。／濟州では、「4.3事件」の教訓から、かねてより非暴力、和合の必要性が叫ばれてきたが、近年韓国政府によって公式に『平和の島』として位置づけられ、2006年より韓国初の『特別自治区』となるなど、独自のアイデンティティを築きつつある。東北アジアの中心に位置し、沖縄とも比されるような苦難の歴史を経てきたこの島は、東アジア近現代史の矛盾とその新しい展望を考える上でも極めて重要な土地である。」

以下は部会報告の要旨である。

部会1【東アジアの国家システムと国家暴力の経験】

報告：朴賛植（4.3研究所常任理事・濟州大研究教授）

「抗争と隠蔽の4.3の歴史:遺骸発掘現場報告」

I. 虐殺・暗葬（秘密裏に埋葬されること）の事例

4.3当時、ほとんどの集団虐殺は、1948年11月中旬頃の焦土化の時期から、1949年2月までに行われた。この時期の虐殺の類型は、焦土化期の無差別虐殺、逃避者の家族の虐殺、自首者の虐殺、陥穽討伐（典型的には、軍・警察が武装隊に偽装して民家に入り協力を要請し、これに応じた人々を銃殺すること）、避難入山者の虐殺、報復虐殺など。被害者の遺体はほとんどは、遺家族や住民により收拾されたが、相当数の遺骸は暗葬され、行方不明となった。

1950年6月25日、朝鮮戦争が起こるや全国的に予備検束が行われ、検束者たちに対する軍当局の銃殺執行が計画的におこなわれた。濟州地域では、7月末～8月下旬にかけて行われた銃殺者に対する機密が厳重に守られ、犠牲日時・場所などは例外を除き、未だに不明である。

II. 遺骸発掘の意義

大韓民国政府の公式報告書が2003年10月15日に確定した。盧武鉉大統領が同年10月31日に謝罪と英霊たちを追慕し冥福を祈った。これによって事件発生後55年を経てやっと、「国家権力による大規模民間人犠牲」の事実を政府が認定するところとなった。

委員会は集団虐殺された人々の名誉回復、遺家族の精神的治癒、4.3事件の徹底的な真相解明、等の趣旨から政府の責任で遺骸発掘を行うことを求めた。

III. 遺骸発掘事業の推移経過

濟州島当局は2006年、「4.3研究所」に遺骸発掘事業計画を依頼し、盧武鉉大統領も第58周年4.3慰霊祭に参加して、政府事業として支援を続けることを約束した。

2006年11月から第一段階発掘事業が始まり、禾北洞から全遺体10体、部分遺体80余点、遺留品378点が発掘・収拾され、推定遺家族とのDNA鑑定による身元確認を行っている。

IV. 現在の発掘状況報告

第二段階発掘調査が2007年9月から始まり、濟州国際空港一帯に対する発掘が行われている。この地帯での推定虐殺は500～600余名である。

部会IV 【4.3と芸術】

発話者：金石範（作家）、玄基栄（作家）、山口泉（作家）、洪性潭（画家）

金石範：金氏は、長編小説「火山島」で知られた、濟州島出身の作家である。韓国では、4.3参加者は匪賊とか暴徒とか呼ばれ、4.3事件に言及することは全くのタブーであった。金氏は日本から、在日韓国人はもとより、韓国の人々に4.3事件の真相を告げる作業を行った。同氏のテーマは「記憶」を呼び起こすことの意義であった。すべての人々と事物は、人々の記憶の中でいつまでも生き長らえることができるので、絶えず記憶を呼び起こすことの大切さを綿々と説いた。午前中、濟州国際空港付近における遺体発掘調査を見学してきたことの話にさしかかるや、氏はこみ上げてくる嗚咽を暫くはとどめようもなかった。

玄基栄：『順伊スニおばさん』の著者。玄氏は1979年、韓国で初めて4.3事件を背景とした小説を世に送った。それまで、韓国では4.3事件に言及することはタブーであったが、本書はそれを公然と破り、その後の4.3事件究明の嚆矢となった。もちろん本書は発禁になったばかりか、著者は捕らえられ厳しい拷問を受けた。同氏は、はっきりと作家の義務としてこう述べた。「死んだものたちのために証言するということは、生き残ったものの義務だ。・・・歴代政権によって、極右によって、歪曲され否定されたその歴史的記憶を正す作業に、作家も加わらねばならない。認められることなく罪悪の濡れ衣を着せられたまま、捨てられた幾多の死、それらの数々の無念の死と傷を、忘却と無名の闇から呼び寄せ鎮魂すること、無意味な死に意味を付与すること、そして死んだものたちだけではなく拷問と獄中生活の中で肉体と精神を破壊された人々のトラウマを慰めること、…」

山口泉：多分野で活躍している日本人作家。同氏の仕事の一つは、韓国の芸術を日本に紹介することであり、今年、洪氏の「靖国の迷妄」展をプロデュースした。当日のテーマは「絶望と希望の弁証法—「連帯」の可能性を超えて朝鮮民族と日本人を

分かつものは、何か？」。話は、金石範の小説の現代的意義を述べることから始まり、その内容は多岐にわたった。

洪成潭：洪氏は、民衆画家たちが描いた4.3事件に関連する絵画を多数収集している。人々のトラウマを鎮めるかのごとく、朗読を背景に、それらを映写した。漢拏山の美しい全容から始まり、倒れた犠牲者、討伐隊による搜索、銃殺直前の犠牲者、舞うシャーマン、やがて悲劇の起こることを知らない幸福そうな家族写真、目隠しされて柱に縛り付けられた犠牲者、捕らえられた民衆たちの銃口の下におびえる眼差し、等々。それらは、4.3とは何であったのか、韓国語を知らないわれわれにも雄弁に物語っていた。

【濟州平和のマダン】

主催校企画でいくつかの催しが行われた。珍しかったのは「マダン」(シャーマンの祈り)であった。映画で見たことはあるが、実際に目の当たりにするのは初めてであった。その他、詩の朗読など多彩であった。最後に、4.3犠牲者の遺族代表の短い挨拶があり、会を終えた。

4. フィールドワーク—4.3事件関連史跡めぐり

① 4.3平和公園

4.3研究所の若い女性研究員の案内で、北部山麓コースをめぐったが、この日は曇っていて、漢拏山の山容を見ることはできなかった。最初は、漢拏山の北部山麓にある「4.3平和公園」。これは2001年に着工され2008年の完成を目指している。すでに慰霊堂と位牌奉安所が完成している。天井の高い広々とした慰霊堂の内部の壁面にはすべて、これまで判明した分だけの犠牲者たちの名前が刻まれている。村ごとに名前が並べられ、これから名前が判明するかも知れない犠牲者たちのための余白も残されている。参加者たちはしばらく、慰霊のため瞑目した。うす暗い堂内で、じっと耳を澄ましていると、そこかしこから人々のうめき声が聞こえてきそうな錯覚にさえ襲われる。

2000年以降は毎年4月3日、慰霊堂の前の広場で慰霊祭が催されている。資料館と文化館は建設中で、大阪ドームによく似た外構だけはできている。ここは今後、平和と人権の教育の場として役立てられる予定だ。

② 村の神を祭る祠堂

濟州島では、いたるところに祠があり、濟州島伝統の信仰を守っている。訪れたときはちょうど、改修中のさなかであった。2、3本の大きな榎があり、夫婦神が祭られている。

③ ナクソンドウ戦略村

1948年11月20日、焦土作戦によって多くの村が焼き討ちにされ、村民は自然洞窟に逃げ住んだ。しかし、村民はそこから追い出され、軍・警察が作った戦略村に隔離・移住させられた。戦略村は高さ約2m、厚さ約1.5m、1辺100m～140mの頑丈な石垣で囲まれた四角形をした村である。石垣には銃眼が作られ、外からの襲撃に備えている。これは、武装隊と住民を遮断し、武装遊撃隊の干渉を狙う作戦であった。戦略村には平均250戸が住まいし、全島で約30箇所つくられ、1948～54年まで存続した。ベトナム戦争でも同じような趣旨で南ベトナムに戦略村が作られたが、この発想は実に済州島事件にあったのかも知れない。現在では一面、蜜柑畑が広がり、のどかな風景を醸しているが、悲しくも過酷な歴史をそのうちに秘めているのであった。

④ モクシムル洞窟

モクシムル洞窟の入り口は、今では鉄門がつくられて研究者以外に入れなくなっているが、ひと一人位が入れる狭いものであった。入り口に近づいてみると、中から少し暖かい風が吹いてきた。中は湿気もなく人が住むこともできたらしい。

ソンプルリ村が1948年11月21日、討伐隊によって焼き討ちにあい、村民たち200名がこの洞窟に隠れ住んだ。同月26日、大規模な討伐隊がやってきて洞窟の中に手榴弾を投げこんで、住民たちを洞窟から出させようとした。出れば死ぬことが分かっていた村民たちは出なかった。洞窟の中では、生後1年にも満たない赤子が泣くので、居所を知られることを恐れた父親は、赤子の口を塞いだところ、赤子は死んでしまった。結局、子供たちだけは生かせたい、ということで意見が一致し、出ることにした。だが、出たとたん、赤子も子供も老人も見境なく銃殺された。拷問の末に道案内を強制された村民も銃殺された。これはかろうじて生き残った村民の証言である。

洞窟の近くの少し広くなったところが処刑場だったらしい。今では、木でできた鳥型のおまじないのようなものを先につけた柱が立てられていた。

⑤ 済州海女抗日記念塔

韓国における抗日運動は、1919年3月1日に始まる万歳独立運動は知られているが、1931年夏から翌年1月まで続いた済州海女の抗日運動については、筆者も迂闊なことに知らなかった。済州海女はこの期間、延べ17130名の参加と238回に及ぶデモを含む大規模な運動であった（現地説明）。海女たちだけではなく青年や農民も参加した。運動の発端は海女に対する日本業者の強搾取と日本人業者による乱獲に対する反抗であった。この大闘争にもかかわらず、海女闘争に関しては有罪者が一人も出ず、また闘争の中心人物の一人である夫春花氏の回想によれば海女の12項目の要求のうち9項目が実現したという。これ

が正しいとすれば、「濟州島海女闘争は植民地時代の争議としては、極めてまれな大成果を勝ち取ったといえる」（藤永壮「1932年濟州島海女のたたかい」）。

最近になって、この運動が朝鮮独立の運動として評価され、これを記念して1988年8月15日にこの塔が立てられた。塔に併設された記念館はごく一部で抗日運動を取り上げているだけで、全体は当時の海女の仕事ぶりと生活を紹介していた。海女の仕事着や道具、それに日本業者が乱獲のために用いた当時では新式の潜水服、等であったが、とくに印象に残ったのは、海女たちが疲れた体に鞭打って夜学にいそしんでいるパノラマであった。この学習を通じて海女たちは理不尽な日本の植民地支配に抵抗する精神を培ったことが理解された。

なお、上掲の藤永氏の研究によれば、この事件と朝鮮共産党再建運動がからまっており、しかも大阪で労働運動を経験していた人物の指導もあり、大阪との関わりも深いとのこと、4.3事件とともに興味深い事件である。

⑥ ブックチョン里、ノブスニ赤ん坊墓

もう陽が沈もうとしていた頃、最後の訪問地となったブックチョン里に着いた。討伐隊の2連隊3大隊の軍人が1949年1月17日、ブックチョン小学校のグラウンドにブックチョン里村民50～100人を集めて銃殺した。死体が付近一帯に散乱したが、逃げ延びた住民が後で死体を埋めた。子供たちの墓も作られたが、そのような赤ん坊墓が20基ほど現在でも残っており、ブックチョン大虐殺を証言している。

ここでも記念館が建設中で、来年中には完成するとのことであった。

5. 真相究明と研究発展への期待

筆者は韓国史についてはズブの素人で4.3研究については、ひたすらその発展を期待するほかはない。南北朝鮮分断の根源は日本の植民地支配にあり、続いて冷戦の只中で分断が固定化され、朝鮮戦争が勃発・休戦となり、その後、世界がポスト冷戦期を迎えているにかかわらず、朝鮮戦争はなお休戦のままにおかれている。その意味では、濟州島民衆が死をかけて戦った課題は未解決のまま残されている。別の言い方をすれば、濟州島民衆は韓国・朝鮮民衆の全人民的な課題を引き受けて文字通り肉体の果てるまで戦ったことになる。この意味で、4.3事件の全体像の解明は待ち望まれる。

現地では、4.3研究所が中心となって聞き取り調査を精力的に行っている。しかし、調査員のお話では、生き残った人々が少なくなっていること、生き残った人々もトラウマに苦しみ容易には口を開こうとはしないこと、さらに、軍・警察や西北青年団関係者は何もしゃべらないこと、聞き取り調査の裏づけとなる資料は警察や軍に残されているはずだが、

今日でもそれには全く接近できないこと、等々の諸困難を克服しなければならない、とのことであった。

日本では、藤永氏らが、在日韓国人からの聞き取り調査を精力的に行ってきておられること（「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査」、『大阪産業大学論集』連載中）を改めて知り、その意義を再認識した次第である。

あとがき

今回の学会は、隣国の現代史の過酷な一面を実地に知る貴重な機会となった。筆者は、パリ・コミュニケーションや秩父事件については少しばかりの勉強を行ってきたが、これからはこれらに4.3事件など朝鮮民衆の闘いも加えなければならない、という強い思いもしている。

最後に、今回の企画のためにお世話くださった学会事務局、とりわけ立命館コア研究センター、済州大学校、4.3研究所、4.3事件や済州島海女闘争について論文をいただいた同僚の藤永先生、資料の韓国語を訳していただいた筆者の受講生の金知恩さん、この方々に深くお礼申し上げたい。

(2007. 11. 30)